



長期経過からインプラント治療を再考する —特に補綴治療の視点から—

東京歯科大学口腔インプラント学講座臨床教授

武田 孝之

補綴治療が必要となる時、患者、歯科医師ともに考えることは多岐にわたり、その優先順位は多様性に富む。その際、歯科医師側としては現症の把握をし、過去から現在に至る崩壊原因を推測し、治療後に残るリスクを把握することが最も重要と考える。なぜならば、ただ単に理にかなった補綴装置を装着するだけでは、多くの問題を内在させてしまいかねないからであり、欠損歯列としての診断・評価を可及的に的確に行わねばならない。

さらに、欠損補綴としては、超高齢社会となった今、極めて長い長期性と自立できなくなった時に生じる問題とを鑑み、患者の年齢も加味して、有するリスクと求める効果を俎上にあげて、治療時のみならず長期的視野に立った選択を患者とともに考えなければならない。

診断・評価は一つであり、治療法は何を優先順位におくかによって、極めて多く存在するため、治療法を論ずることは大切だが、その前の段階が極めて重要となる。すなわち、インプラントを適用する前に考えねばならないことが多く、かつ、インプラントという特殊な治療法を選択する根拠と長期的対応を考えねばならない。

EBMに則った治療選択が提唱されて久しく時間が経つ。一般的に補綴治療は適切なEBMの適用が難しいと言われてきたが、インプラント治療においては従来法に比較して、テクニカルアセスメントという観点ではやや根拠が揃ってきているとも言える。

しかし、残念ながら、他の補綴法と比較してインプラント治療の選択の是非を問うガイドラインに相当するものは極めて限られる。

このような状況下で根拠とは全く言えないが、多様性に富む多くの症例を長期間観察した結果、見えてきた傾向を供覧し、今後のインプラント治療に役立てて頂けたら幸いである。

【略 歴】

1980年 東京歯科大学卒業

1985年 同大学院歯科補綴学修了 歯科学博士授与

1990年 東京都千代田区にて開院

2005年 東京歯科大学口腔インプラント学講座臨床教授 現在に至る

【学会活動】

日本補綴歯科学会 指導医・専門医

日本口腔インプラント学会 専門医